

北海道 みなとまち紀行

釧路編②

第 8 号

■釧路編②

今回の北海道みなとまち紀行・釧路編②では2日間にわたって幣舞橋^{ぬさまいばし}周辺のウォーターフロントにおけるイベント、立地施設、市内の歴史的施設等の見学及び市郊外の釧路湿原等の見学を行いました。一日目は毎年 8 月上旬に開催される「くしろ港まつり」に合わせて幣舞橋周辺の釧路川で行われる「釧路港舟漕ぎ大会」を見学しました。二日目はウォーターフロントの代表的な施設である「釧路フィッシャーマンズワープ MOO&EGG」、及びそれに隣接する「北海道立釧路芸術館」の見学を行った後、春採湖畔^{ちくろうえん}の「竹老園東家総本店」で昼食をとりました。その後、「米町ふるさと館」、釧路市郊外の「釧路市湿原展望台」、「釧路湿原美術館」を見学した後、



幣舞公園 花時計

釧路駅近くの「浦田菓子舗」に立ち寄り、その後、「和商市場」で夕食をとりました。

【釧路港舟漕ぎ大会】

「くしろ港まつり」は昭和 23 年（1948）の釧路港開港 50 年を記念して開催された「釧路港開港 50 年港まつり」を第一回として現在まで続く釧路市の夏を彩る祭りです。「釧路港舟漕ぎ大会」は例年この「くしろ港まつり」の主要行事の一つとして市民踊りパレードや大漁ばやしパレードと並んで人気のあるイベントとなっています（地図①）。この大会は、港を市民の憩いの場として活用し、釧路港と舟漕ぎの魅力を広め、釧路の活気と景気を取り



全力でオールを漕ぐ参加チーム

戻すために行われているもので平成 17 年（2005）に第一回大会が開催され今回で 20 回目になります。

今回は、一般の部 51 チーム、女性の部 15 チームの計 66 チームが参加し、釧路川に架かる幣舞橋と久寿里橋^{くすりばし}の間に往復 200m（100m 折り返し）のコースを作り 1 チーム 8 名（漕ぎ手 6 名、声掛け 1 名、旗持ち 1 名）でタイムレースが行われました。船には舵^{かじ}がなく、漕ぎ手の息が合わないと蛇行するため、力の強いチームが必ずしも勝つわけではなく、チームワークの良いチームや、漕ぎ方を工夫したチーム等が勝つことが多い競技となっています。チームの中には台湾の留学生や、釧路コールマインに所属するベトナム研修生のチームもあり国際色豊かな大会となりました。

大会は、8 月 3 日（土）午前 8 時 30 分に濱谷美津夫釧路港舟漕ぎ大会実行委員会会長による開会挨拶、及び蝦名大也釧路市長による来賓者代表挨拶が行われた後、競技が開始され、一度に 3 隻が同時スタートしました。



実行委員会会長による開会挨拶

スタート後、前方にまっすぐ進むことができず大きく蛇行して体勢を立直すのに四苦八苦する舟が続出し、また、100mの折り返し時の旗竿をターンする場面でもうまく回れず苦戦する舟が多く見られました。釧路川の流れや潮流の影響等を受けながら舵のない船を操船することの難しさが感じられましたが、常日頃、川や湖でカヌーに漕ぎなれた人々の操船する舟はこうした困難な状況をうまく克服しているようで、技量の差が表れているように見えました。この競技の最中、恒例の女性アナウンサーによる実況中継が行われましたが、このアナウンスが当意即妙でユーモラスでしたので大会が盛り上がりました。

競技は個別レースの後、タイム上位チームが、一般の部は準決勝レース、決勝レースにより、また女性の部は決勝レースにより優勝者を決めました。決勝レースは一般の部、女性の部とも、えりすぐりのチームによる手に汗握る白熱したレースとなり大いに会場が沸きました。そして最終的に一般の部は、屈斜路湖や釧路川でカヌー遊びをしている仲間がメンバーである「ラビッツ」が2分0秒49で9回目の優勝をしました。また、女性の部は釧路町学校給食センターの栄養士、調理師さんたちからなる「釧路町QSしゃもじーS」が2分39秒43で初優勝しました。

この大会では千数百人の人々が、盛夏の水辺空間における舟漕ぎレースを観戦し応援したと推測されます。現在、港湾における舟漕ぎ大会は、北海道ではこの釧路港の他、室蘭港や根室港、稚内港などで行われていますが、港の水辺空間を活用して、



100mの折り返し地点旗竿へ向かって進む参加チーム。写真は幣舞橋から撮影、遠くに見えるのは久寿里橋

もっと市民に親しんでもらうためにもこのような大会が他の港でも行われるようになってほしいと思います。

【釧路フィッシャーメンズワーフ MOO&EGG】

「釧路フィッシャーメンズワーフ MOO&EGG」は、幣舞橋に隣接する錦町のウォーターフロントに平成元年（1989）7月オープンした水産加工品やお土産の販売店と飲食店等を備えた複合商業施設MOO（Marine Our Oasis：海は私たちの憩いの場）と全天候型緑地EGG（Ever Green Garden：いつも緑の園）からなる釧路市を代表する情報発信・交流拠点施設です（地図②）。

MOOは釧路市出身の建築家、毛綱毅曠^{もづなきこう}が設計した施設で、「さかな・海・ふれあい」をコンセプトとした、釧路市のシンボルゾーンにふさわしいウォーターフロント施設です。街並みが集約されたような連続した三角屋根や、人工の形（マスト、クレーン）に置き換えられた自然（鶴、魚、屋根）を散りばめて釧路の街を表現しています。EGGは全面ガラス張りの丸い形の建物の全天候型緑地です。



釧路フィッシャーメンズワーフMOO(左)、EGG(右)

MOOの1階には新鮮な魚介類を扱う釧路市場や、地元や北海道のお土産が買えるショップが並んでいます。これらの中で「魚政」の「さんまんま」は、秘伝のたれに漬け込んだサンマとおこわを抱き合わせ、炭火でこんがり焼いたもので、各地の北海道物産展でも出品している人気の逸品です。食べてみるとサンマは脂がのっており、炭火でカリッと焦げたおこわとの絶妙なバランスでおいしかったです。

2階は屋台風の居酒屋が並ぶ「港の屋台」で港町・釧路ならではの新鮮な魚介類、釧路名物のザンギ、中華料理等の店が並んでいます。3階はビアホール「釧路霧のビール園」でジンギスカンやラムしゃぶ、そして生ビールを楽しむことができます。5階は多目的アリーナとなっており普段はイベントスペースとなっていますが、地震・津波等の緊急時には避難場所となります。また、M00の外の釧路川に面したウォーターフロントでは毎年5月第3金曜日～10月末の期間、「岸壁炉ばた」もオープンしており、夜の幣舞橋を眺めながら旬の魚介等を炭火で焼いて楽しむことができます。その他、M00の対岸からは毎年4月29日～11月末（火・水曜定休）までの日没の1時間前に出航し、世界三大夕日の一つである釧路の夕日を海上から楽しめる夕日観光クルーズ船（40名程度乗船可能）が運航しています。



MOOの対岸にある夕日観光クルーズ船の船着場(岸壁)

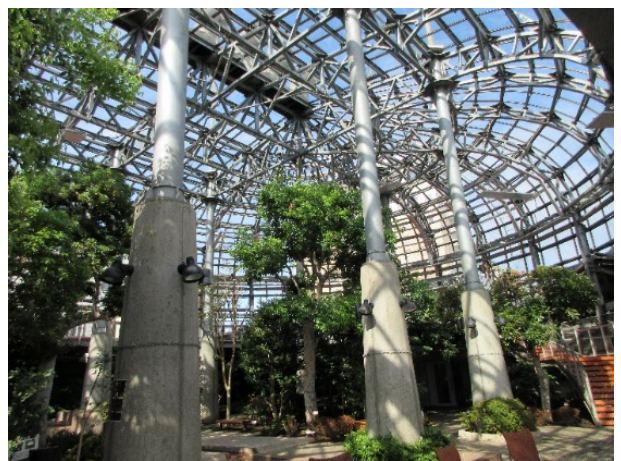
一方、EGGは冬の長い釧路でも一年を通して花と緑、太陽と水辺に憩うことのできる全天候型緑地で、クスノキ、ヤマモモ等の常緑樹を年中鑑賞できます。また、初夏から秋の間はミニコンサートやイベントも開催されています。その他、本施設内にある「EGG Café」では道東の牛乳、乳製品をたっぷり使用したメニューが用意されている他、今人気の厚岸ウイスキーのハイボールも飲むことができます。



MOO1階のショッピングゾーン



「魚政」の「さんまんま」



EGG内部の植物園



「EGG Café」



MOOの釧路川に面した「岸壁炉ばた」

【北海道立釧路芸術館】

「釧路フィッシャーマンズワープ M00」に隣接した幸町さいわいちょうに「北海道立釧路芸術館」があります(地図③)。この施設はウォーターフロントの主要施設となっていますので訪問しました。

昭和52年(1977)に札幌に道立近代美術館が開館されましたが、その後、旭川、函館、帯広の各



「北海道立釧路芸術館」

地域に道立美術館が開館され、釧路芸術館はその後、平成10年（1998）10月に開設しました。

この「北海道立釧路芸術館」では、釧路湿原や知床など、国際的にも北海道を代表する自然に恵まれた地域に立地していることから、自然と芸術との関わり、及び地域と芸術との関わりをとらえるような絵画・彫刻等のコレクションを行っています。さらに芸術の新たな領域にも視野を広げるため、それまで他の美術館では本格的な収集がなされていなかった写真等の映像メディアも収集しています。常設展はありませんが、個別に特別展が開催されています。今回は画家・鴨居玲の「生と死を見つめて」の展示を行っていました。

鴨居玲（1928～1985）は「人間とは何か」をテーマに、人間の心の闇や弱さを描き続けた画家です。自らの内面を見つめ、孤独感や苦悩を表現した作品の数々は、没後、約40年を経た今も世代を超えて人々の共感を呼んでおり、本展では絶筆を含む約70点により鴨居の芸術世界を紹介していました。

また、同時開催で「長倉洋海写真展」も行われていました。釧路出身の写真家・長倉洋海（1952～）は紛争地や辺境の地など世界中を旅し、困難な状況や、特色ある風土や伝統の中で生きる人々をとらえ、人間の内面に迫る表現として評価されています。この展覧会では、人間を軸に戦場から地球へと関心を広げてきた長倉の活動と思索の歩みが、当館所蔵の作品と作家所蔵の新作によりたどられていました。

なお、昨年12月から今年4月までは「釧路芸術館・珠玉のコレクションーあなたとともに25年ー」として、「自然と芸術」「地域と芸術」「映像芸術」をテーマとした釧路芸術館所蔵約900点の作品の中から厳選した羽生輝^{ひかる}や高坂和子^{こうさか}等の地元の作家を含む作品の展示が行われていました。

【太平洋石炭販売輸送 臨港線跡地】

「北海道立釧路芸術館」を出て、幣舞橋から国道113号（富士見坂桜ヶ丘通）を通って昼食場所の春採湖畔にある「竹老園東家総本店」へ向かいます。

途中、富士見坂を上り、千代ノ浦の坂を下っていくと千代ノ浦海岸の近くに鉄道の跡地が見えますが、これは太平洋炭礦の石炭^{はるとり}を春採駅から釧路東港^{しれと}の知人駅まで輸送していた太平洋石炭販売輸送の臨港線の跡地です（地図④）。

かつて太平洋炭礦（株）は最盛期には年間約260万tの石炭を生産していましたが、昭和40年代以降、石油が多く使用されるようになったため平成14年（2002）1月30日に閉山し、翌日から地元企業出資の新会社「釧路コールマイン（株）」となり石炭の生産が引き継がれました。その後、採炭量が減少して鉄道による石炭輸送が不要になったことから釧路コールマインは臨港鉄道を運営していた太平洋石炭販売輸送に対し平成31年（2019）2月に次年度の契約をしない方針を伝えたため臨港鉄道は令和元年（2019）6月に廃止されました。この跡地はその臨港線の路線が設置されていたルートの名残です。

なお、釧路コールマインは、現在、国内で唯一の坑内掘り炭鉱として年間、約25～30万tの石炭を海底下から生産しており、この石炭は令和2年（2020）から営業運転を開始した釧路火力発電所^{おこつ}（興津）に供給している他、道内の製糖工場やでんぷん工場等に供給しています。また、ベトナム、中国等の産炭国における生産・保安技術の向上を図り我が国への安定供給を確保するため、それら産炭国の技術者の研修も行っています。

【春採湖】

「竹老園東家総本店」は春採湖の西端にあります。この「春採湖」は、周囲約4.7kmの海跡湖で国の天然記念物のヒブナが生息しており、また湖畔にはアイヌの遺跡のチャシ(砦)があります(地図⑤)。

周辺は春採公園となっており、自然情報を解説する春採湖ネイチャーセンターや湖畔に沿った遊歩道、野鳥観察舎などがあり市民の憩いのスポットとなっています。湖畔の北側の丘陵部には釧路編①で紹介した「釧路市立博物館」が建っています。



春採湖。遠くの丘に見える茶色の建物は「釧路市立博物館」

【竹老園東家総本店】

「竹老園東家総本店」は明治45年(1912)に釧路で開業しましたが、現在の春採湖畔に店が建てられたのは昭和2年(1927)です。昭和7年(1932)、庭園を含めた建物全体を二代目伊藤竹次郎の一字「竹」をとって「竹老園東家総本店」と名付けました。建物の主屋は唐破風(中央部は凸、両端部は凹の反り曲がった曲線状の屋根側面板)を冠する特徴的な玄関となっています(地図⑥)。



「竹老園東家総本店」の主屋建物



特製品コース(そば寿司・かしわぬき(上)、茶そば・蘭切りそば(下))

この店では、4品セットの特製品コースが人気で、かしわぬき・蘭切りそば・茶そば・そば寿司の4品が味わえます。今日は、このコースを注文しました。

かしわぬきは「かしわそば」からそばを抜いたものでコリコリした歯ごたえのある親鳥からコクのある出汁が出ています。蘭切りそばは、卵切りの卵を蘭の字に当て、当総本店の雰囲気に合わせて「蘭の花」を表現したもので、卵黄をつなぎにしており、純白の上更科粉が卵黄の色と風味により格別なものに仕立てられ噛めば噛むほど口の中に甘味が広がります。茶そばは蘭切りそばに上質の抹茶を加えたもので上品な抹茶の風味が香ります。そば寿司は三代目当主伊藤徳治が昭和25年(1950)に創作したものだそうで、そばをご飯に見立て甘酢でそばをしめ海苔で巻いており、ほんのり生姜の風味がしています。このコースは、そば尽くしのコースで、いろいろなそばを味わえ、量は少し多いですが満足できました。なお、これら4品は単品で注文することもできます。

【米町ふるさと館】

「竹老園東家総本店」から国道113号(富士見坂桜ヶ丘通)を通って米町公園の近くにある「米町ふるさと館」へ向かいます。

米町地区は釧路発祥の地とされます。かつては多くの料亭や遊郭が立ち並び、釧路経済の中心として賑わっていました。石川啄木と芸妓小奴が恋仲になった舞台ともいわれます。この「米町」という地名は、釧路編①にも記述していますが、江戸時代末期から明治初めまで釧路地方の開発にあつ



「米町ふるさと館」には、佐野孫右衛門に関する資料をはじめ、明治・大正時代の釧路の街並みや経済推移などを学べる資料が多数展示されている

た佐野孫右衛門の屋号「米屋」^{よねや}に由来するのだそうです。

「米町ふるさと館」は新潟県・佐渡出身の海産物商・渡辺虎蔵氏が渡辺虎蔵商店兼住宅として使用していたもので、釧路市内に残される最古(明治33年上棟)の木造民家(町家)です(地図⑦)。平成元年(1989)に田村艶子氏から釧路市に寄贈され、道路拡幅工事の際、「ふるさと創生事業」として後方に曳家・改修された後に、賑やかな時代の名残を今に伝える資料館として開館されました。建物の外壁は白漆喰^{しろしっくい}を塗り、正面の両端にうだつ(防火を兼ねた装飾的な袖壁)を上げ、屋根は棧瓦葺^{さんかわらぶき}(断面が波型の瓦を用いて葺いたもの)で防火に配慮しています。室内は、和室4室(一部2階)と居間の他、店舗の玄関から裏口まで続く「通り庭」と呼ばれる商家特有の土間が特徴となっています。館内には明治・大正時代の街並みの写真や釧路の経済成長を学べるパネル、佐野孫右衛門や石川啄木の資料等が展示されています。

佐野孫右衛門についてですが、佐野家は江戸時代寛政年間に新潟県から釧路に移り代々、場所請負経営(それまでの幕府による直接の漁場経営から民間の商人による請負経営とすること)を行っていました。その後、明治3年(1870)に4代目佐野孫右衛門が、秋田、山形、函館地方から174戸、

637名の移民をこの地に入れて現在の釧路市の基を築きました。この「米町ふるさと館」の近くにある児童公園(佐野碑園)には、釧路を開くにあたって大きな功績のあった、この孫右衛門の徳を偲んで、昭和10年(1935)、釧路港開港35周年記念に併せ、佐野氏紀功碑が建てられています。

【浪花町煉瓦倉庫群・十六番倉庫】

「米町ふるさと館」から車で北に12km行ったところにある、釧路湿原の西端に位置する「釧路市湿原展望台」へ向かいます。途中、国道38号の釧路フィッシャーマンズワープM00を通り過ぎた、釧路川の右岸のウォーターフロントに「浪花町煉瓦倉庫群」が見えます(地図⑧)。

この地域は、幹線道路として、現在の国道38号にあたる道路が通じていたことから、昭和7年(1932)に「西幣舞」と呼ばれていたこの周辺が10の町名に分割された際、道路の両サイドが商業地として繁盛することを祈願して、商業都市大阪にちなんで「浪花町」と名付けられたとされています。この浪花町の一角に大きな煉瓦倉庫が立ち並んでいます。これらの煉瓦倉庫は明治時代に建てられたものでかつて、木材や農産物の集散基地として賑わいを見せ、現在でも、往時をしのばせる築100年近い煉瓦倉庫が多数残されています。

この煉瓦倉庫群の一つであり、代表格ともいえる「十六番倉庫」と呼ばれる煉瓦倉庫は、明治43年(1910)に三ツ輪運輸(株)の前身の三上運送合資会社が穀物類の保管と品質保持を目的に建設したのですが、釧路市出身の作家で、代表作「挽歌」



「浪花町十六番倉庫」

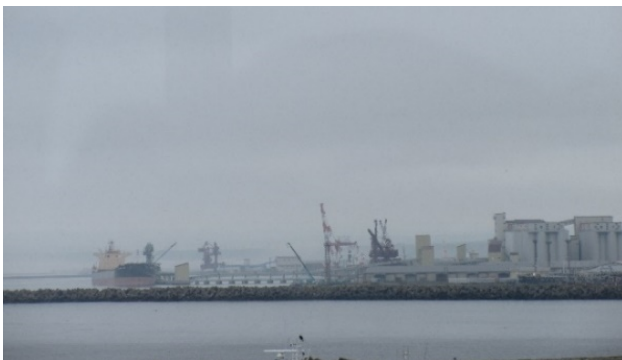
で知られる原田康子の母方の祖父が経営する原田商店が一時期この倉庫を使用していたことから、「原田康子氏縁の建物」として市民から親しまれる存在となっています。平成 12 年（2000）には、釧根地域の芸術文化を創造する場としての活用を目的に「NPO 法人 浪花町十六番倉庫」が設立され、ライブや演劇、展覧会等の文化・芸術拠点として活用され、多くの方々に親しまれていましたが、経営上の理由などから、平成 28 年（2016）、同 NPO は解散し、現在は活用されておらず、とても残念に思います。

【釧路西港】

さらに進んで新釧路川を渡ると左手に「釧路西港」が見えます（地図⑨）。釧路港は江戸時代、釧路川の河口部に位置する場所（現在の東港）に松前藩の交易所が置かれたのが始まりとされます。明治時代には北海道開発の拠点の一つとなり、背後圏の開発や産業発展とともに港の拡張が進展し、戦後は昭和 26 年（1951）に重要港湾に指定され、昭和 44 年（1969）からは物流拠点機能の拡充のため西港の整備が進められてきました。

東港は古くから石炭や木材の輸送拠点、また全国有数の水揚げを誇る漁業基地として発展しましたが、現在はクルーズ客船が寄港する耐震旅客船ターミナルも整備され、ウォーターフロントの賑わいや市民の交流の中心地ともなっています。

一方、こちらの西港は現在、第 1～4 ふ頭が供用され、物流の中核を担っており、製紙業製品や木材チップ、家畜の穀物飼料、生乳、外貿コンテナ（中国・韓国）等が取り扱われています。これらのうち



「釧路西港」遠景（マリン・トボスくしろ展望コーナーより撮影）

穀物飼料については、わが国初の国際バルク戦略港湾の国際物流ターミナル（岸壁水深-14m）が平成 31 年（2019）3 月、第 2 ふ頭に整備され供用を開始しており背後圏の酪農地帯へ穀物飼料を供給しています。

また、クルーズ客船は、令和 6 年度は釧路港全体で 18 隻の入港を予定していますが、岸壁水深の関係から、5 万 t クラスまでのクルーズ客船（9 隻）は東港の耐震旅客船ターミナルを、また 5 万 t を超える大型クルーズ客船（9 隻）はこちらの西港第 4 ふ頭を利用する予定になっています。このような大型クルーズ客船の西港利用は、現在の旅客船岸壁の水深の関係からやむを得ない面がありますが、西港の物流に支障を来していることやクルーズ船客の利便性の面から、今後、大型クルーズ客船に対応できる旅客船ターミナルを市街地の賑わい空間に近い東港に整備することが望まれます。

【釧路市湿原展望台】



「釧路市湿原展望台」

釧路湿原は日本最大の湿原・湿地です。この湿原・湿地の 2 万 8,788ha が釧路湿原国立公園となっており、その中心部の 7,863ha がラムサール条約登録湿地となっています。湿原の中を釧路川が蛇行しながら流れており、ヨシ・スゲ湿原が大部分を占めます。

昭和 47 年（1972）に田中角栄元首相によって「日本列島改造論」が提唱され、釧路湿原も工業団地にするという構想が提出されましたが、自然保護団体のボランティアの方々によって釧路湿原の価値を証明する調査が展開され、工業団地化構想は白紙になりました。その後、釧路湿原は昭和 55 年



「釧路市湿原展望台」の中央展示室の吹き抜け空間

(1980)にラムサール条約(水鳥の生息地として国際的に重要な湿地と、そこに生息する動植物の保全に関する国際条約)の登録地となりました。さらに昭和62年(1987)には国内で28番目の国立公園となる釧路湿原国立公園に指定されました。

「釧路市湿原展望台」は昭和59年(1984)にオープンした、湿原に群がる^{やちぼうず}谷地坊主(スゲ属の植物)をモチーフとした古風な西欧の城を思わせる建物で毛綱毅曠がデザインを手がけたものです(地図⑩)。建物内部の中央展示室は1階から3階まで吹き抜け空間となっており、3階部分はヒダのような緩やかな双曲線が重層するコンクリートの壁に包まれ異次元の空間のような感じがします。

1階はフリースペースとなっており休憩したり、湿原周辺の情報を入手したりすることができます。また、売店もあります。2階には釧路湿原を再現したゾーンがあり、幻の巨大魚「イトウ」や特別天然記念物タンチョウの営巣状況、その他の動植物等の展示物が多数展示されています。3階の展望室には毛綱毅曠がこれまで手がけた釧路フィッシャー



遠くに阿寒の山々が見える釧路湿原(サテライト展望台から撮影)

マンズワープ M00 や釧路市立博物館、釧路市立幣舞中学校等の建築物の写真や設計コンセプト等が展示されています。

また、屋上からは釧路湿原の風景を展望することができます。展望台の周囲には、2.5kmを約1時間で回る湿原探勝遊歩道があり、7カ所の広場とサテライト展望台があります。サテライト展望台からの釧路湿原の眺めがいいと売店の人が教えてくれましたので遊歩道を歩いてサテライト展望台に向かいました。片道約1kmのルートですが初めての500mほどは下りで、その後丘陵を上るルートになっていましたが、この後半の上りはちょっとした山登りのようなもので日頃運動不足のせい或少しきつかったです。でも、サテライト展望台からの眺めは素晴らしく湿原や阿寒の山々を見渡せることができ、来てよかったですと思いました。

【釧路湿原美術館】



「釧路湿原美術館」

「釧路市湿原展望台」から国道240号(まりも国道)を通って阿寒町の「釧路湿原美術館」へ向かいます。

「釧路湿原美術館」は、釧路湿原をはじめ道東の自然を描き続けた佐々木榮松^{えいしょう}画伯の作品を保存・展示している美術館です(地図⑪)。建物の外観は丹頂鶴が羽を広げているような佇まいで、中央の白い建物の上部に、丹頂鶴の頭部の赤い部分を模して、赤く「佐々木榮松」の「榮」の文字が描かれています。

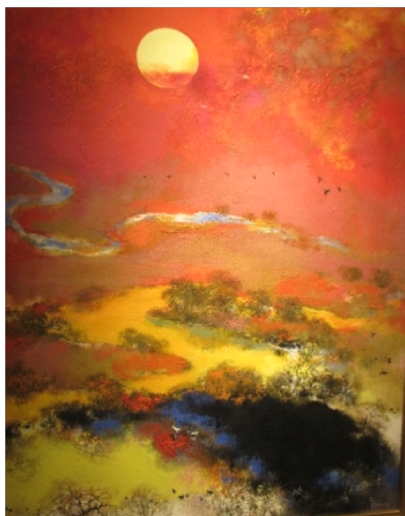
平成24年(2012)に佐々木榮松画伯が98歳で亡くなられ、現在の当美術館の高野範子理事長に



照明で一点一点佐々木画伯の絵の世界観を演出しているという館内

約 600 点の作品が遺贈されたことから、画伯と親交のあった人々が道内外で賛助寄付を募り、その寄付でこの阿寒町の建物を購入、遺贈された作品を寄贈して平成 25 年（2013）6 月 15 日、「NPO 法人 佐々木榮松記念 釧路湿原美術館」が設立されました。当美術館に収蔵されている油絵、水彩、デッサンなど約 600 点の作品のうち、約 30 点を常設展示しています。

今回ご案内いただいた高野理事長の説明では、佐々木画伯は、釧路湿原が国立公園に指定されるかなり以前から魚釣りや絵の取材のために湿原の奥深くまでわけ入り、山や川、沼、動植物などを詩情豊かに描き込んでいたそうです。そして、命あるものや自然現象に神の存在を感じ、畏怖と畏敬の念をもって接するとともに、命あるものは生まれては死に、次の命に繋げるといった摂理や輪廻を通じた「命の描写」をテーマとされていたそうです。



昭和 62 年（1987）に釧路湿原が国立公園に指定された時のポスター原画に選ばれた「釧路湿原」

訪れた当日、当美術館では、畳 2 枚以上の大きな絵で偉大な力を感じさせる「エゾ鹿の沢」や、極寒の冬、川の中で眠る月明かりの中の丹頂鶴を美しく青の世界に重ねた「鶴眠る」、湿原及び湿原に沈む落日を色鮮やかに描いた「釧路湿原」など、素晴らしい作品が多数展示されていました。

高野理事長は、ご主人が教員で転勤が多かったそうですが、平成 6 年（1994）、ご主人の赴任地の釧路市の、今は無き JR 釧路駅構内にあった釧路ステーション画廊で佐々木画伯と出会いました。そこで、華道家を目指し空間における生け花の表現方法について独自の作風を考え発表しているというお話を佐々木画伯にしたところ共感され、その後、佐々木画伯と家族付き合いをされたそうです。そして 88 歳から 98 歳で身罷られるまでの 10 年間、身寄りのない佐々木画伯を娘のように家族として支え、法定代理人となり毎日の生活全般や介護を担うとともに専属画商として経済面も支えたそうです。その後、佐々木画伯が亡くなる時「命の恩人」と言われ、著作権を含む絵画を遺贈されたことからこの美術館が設立され、昨年 10 周年を迎えられました。高野理事長は、この美術館での常設展や企画展等を通して、また YouTube 等の情報発信も行いながら佐々木画伯が追及した絵の世界をファンにわかりやすく伝えようとされています。今回、展示されているいくつかの絵の解説をしていただきましたが、絵が描かれた背景も詳しく説明され、とてもわかりやすく感銘を受けました。

【浦田菓子舗】

釧路湿原美術館から国道 240 号（まりも国道）及び国道 38 号を通って釧路駅方面へ向かいます。釧路駅から少し幣舞橋方向へ向かった北大通り沿いに立地している「浦田菓子舗」は、明治 40 年（1907）創業の老舗菓子店です（地図⑫）。看板メニューは「しとき」「丸木舟」「みそまんじゅう」などです。「しとき」は、この店のお菓子の中で最も古いお菓子で、アイヌの女性が礼装時に身に付ける首飾りをシトキと呼びますが、アイヌ民族の最高の宝器であるこの首飾りの装飾品「飾板付き玉飾り」をイ



「浦田菓子舗」の外観(上)と
店内の様子(左)。釧路市民に
愛されている和菓子が並ぶ



和菓子の「しとき」

イメージしたものです。きれいな薄緑色をしていて、外側が砂糖でコーティングされ、青えんどうの羊羹ようかんの中に白玉を入れたもので、砂糖と羊羹と白玉がうまく調和しておりとてもおいしかったです。「丸木舟」はアイヌ民族が河川の移動に使用していた丸木舟をモチーフにしたもので、外側はクッキーのようなサクッとした食感で、中にはクルミやレーズン、ゴマなどが練り合わされた餡が入っています。洋菓子和菓子と一緒に買ったようなお菓子で、控えめな甘さが好評です。「みそまんじゅう」は味噌を使用し、少し塩気のある皮で中にこしあんが入っています。一口サイズのまんじゅうで地元の人々に人気があり、この日は昼過ぎに売切れになっていました。この店のお菓子は空港や駅などで販売していないため、この店に来て買わなければなりません、一世紀以上も続く伝統の和菓子作りの店で、常連客も多く釧路市民に愛されている店といえるでしょう。

【和商市場】

「浦田菓子舗」を出て北大通りを通り釧路駅の近くの「和商市場」で夕食をとります。

「和商市場」は函館朝市、札幌二条市場と並ぶ北海道三大市場の一つです(地図⑬)。「和して商う」をモットーに全国屈指の港町ならではの新鮮な魚

介類を取り扱っています。ここでは勝手丼が有名です。勝手丼は、別に購入したご飯入りの丼を片手に自分の好きな具だけを好き勝手にのせられる海鮮丼のことです。具材の種類は店によってさまざままで、自分好みの具材でオリジナルな海鮮丼を味わうことができます。この勝手丼は元々ツーリングで釧路を訪れたお金のないライダーのために、総菜屋さんでご飯だけを買ってもらい、海産物を小売りしたことが始まりだそうで、釧路のさまざまな海産物を手軽に堪能できます。

まず総菜屋さんでご飯を購入します。ご飯はノーマルな白米ご飯と酢飯の2種類があり、お好みでどちらかを選びます。ここではカニの味噌汁も販売されています。次に具材を選びますが、具材を購入できる店舗はいくつかあり、店先で具材を見て選びます。価格はほとんどが一切れの価格となっています。具材はいろいろあり、どれにしようか迷うほどです。具材をのせ終わったらオリジナルの勝手丼の完成で、場内中央にあるイートスペースで食べます。今日は写真のような勝手丼を作り食べました。自分で選んだ魚介類をのせた勝手丼ということもあり新鮮でおいしかったです。



観光客で賑わう勝手丼を扱っているコーナー。左側がイートスペース



勝手丼の具材の販売店



今回、盛り合わせた勝手丼

(関野高志 記)

【今回の巡回ルート】



- JR釧路駅 → ①釧路港舟漕ぎ大会 → ②釧路フィッシャーマンズワーフMOO & EGG →
 → ③北海道立釧路芸術館 → ④太平洋石炭販売輸送臨港線跡地 → ⑤春採湖 → ⑥竹老園東家総本店
- ⑥竹老園東家総本店 → ⑦米町ふるさと館 → ⑧浪花町十六番倉庫 → ⑨釧路西港 → ⑩釧路市湿原展望台 →
 → ⑪釧路湿原美術館
- ⑪釧路湿原美術館 → ⑫浦田菓子舗 → ⑬和商市場 → JR釧路駅

【今回巡った箇所のミニ情報】

地図①

釧路フィッシャーマンズワーフ MOO

釧路市錦町 2-4

電話 0154-23-0600

定休 なし

営業時間 10:00～19:00

(7～8 月は 9:00～19:00)

地図②

釧路フィッシャーマンズワーフ EGG

釧路市北大通り 1 丁目 2 番地

電話 0154-53-3371

定休 なし

開館時間 6:00～22:00(4～10 月)

7:00～22:00(11～3 月)

入場料 無料

地図③

北海道立釧路芸術館

釧路市幸町 4 丁目 1 番 5 号

電話 0154-23-2381

定休 月曜日(祝日等の場合は翌日)

開館時間 9:30～17:00

入場料 展示会毎に設定

地図⑥

竹老園東家総本店

釧路市柏木町 3-19

電話 0154-41-6291

定休 火曜日

営業時間 お座敷 11:00～14:30

ホール 11:00～16:00

地図⑦

米町ふるさと館

釧路市米町 1 丁目 1-21

電話 0154-41-2032

定休 毎週 月～木曜日

(10～4 月は休館)

開館時間 10:00～15:00

入場料 無料

地図⑩

釧路市湿原展望台

釧路市北斗 6-11

電話 0154-56-2424

定休 年末年始

開館時間 9:00～17:00

8:30～18:00(4～9 月)

入場料 480 円(展望台)

地図⑪

釧路湿原美術館

釧路市阿寒町上阿寒 23-38

電話 0154-66-1117

定休 毎週 火～木曜日(5～10 月)

毎週 月～木曜日(11～12/28)

冬季休館(12/29～4 月)

開館時間 10:00～16:00

入場料 1000 円

地図⑫

浦田菓子舗

釧路市北大通 8 丁目 1

電話 0154-22-3565

定休 日曜日・祝日

営業時間 10:00～16:00

地図⑬

和商市場

釧路市黒金町 13-25

電話 0154-22-3226

定休 日曜日

営業時間 8:00～17:00

<連絡先>

NPO 法人 北海道みなとの文化振興機構

札幌市北区北 11 条西 2 丁目 2-17 セントラル札幌北ビル 5 階

e-mail アドレス mail@minatobunka-npo.info

ホームページ <https://minatobunka-npo.info>